



دکتر板東の メデイカルリサーチ

Vol. 134

～固い石 ペルーの文化 基となり～

<http://pianomed-mr.jp/>

安倍首相は国際舞台で活躍している。夏には、ブラジルのリオで開催された五輪の閉会式に、マリオとして登場。秋にはペルーのリマで、アジア太平洋経済協力会議(APEC)や環太平洋連携協定(TPP)にも出席された。

不思議なことに、私も首相と同じように、リオとリマを訪れたのである。ただ、異なるのは、私には特別のミッションなど何も与えられておらず、世のためにお役にたつていないことが挙げられよう。

今回は、ペルーについて若干触れてみたい。

ペルーのリマ

羽田空港を出発して25時間でペルーの首都リマに到着した。日本との時差は、マイナス14時間だ。南米では、リオやサンパウロと並ぶ南米のゲートウェイで、人口約890万人を擁する(図1)。

リマには、かつて植民地だった時代の文化と近代文化が共存し融合している。



図1

空港でオフィシャルタクシーを申込み、胸に名札をつけた係員が英語できちんと対応。「OK、それでは出発!」と彼自身が運転手とわかり、心安心だ。

新市街まで30分走り、近辺まで到着。地図をみせても、24時間営業のスーパーマーケットの隣だと説明しても、迷うばかり。

結局あまり地図を参考とせず、道行く人に尋ねながら到着できた。

ペルーの文化

私が外国出張に出かけると、必ず訪れるのはその国の博物館である。



図2

今回も早速ペルーの歴史や文化を拝見させて頂いた。面白いと感じたのは、人や動物の姿をうまく捉えた作品が多いこと。それも、英語圏のヨーロッパとは



図3

異なり、線が太く、身体も太く、土台や基盤がずっしりと重たい。人物や動物の描写は誇張する特徴などもみられた(図2、3)。

歴史的に、当地の文明はメソポタミア・中国・中部アメリカの影響により形成されたらしい(図4)。さらに、海路ルートによって、欧州やアフリカの様々な芸術文化が働きかけた可能性もあるだろう。

以上があわさって、ペルーの山岳地帯で高いレベルの文明が栄えたとは驚きである。



図4

クスコ

かつて、ペルーにはインカ帝国があり、首都はクスコだった(図5)。クスコとはケチュア語でヘソを意味する。太陽神を崇拜した人々は世界の中心だったのだから。

16世紀、スペインの征服者たちがインカを山奥の地に追いやった。そして、インカの礎石の上に、スペインの教会や邸宅を建造すること。このコントラストが文化的価値を生み、ユネスコの世界遺産にも登録されたのである。



図5

ペルーは石の文化が特徴である。サクサイワマン遺跡では、巨大な石が隙間なく積み重なっており、驚くべき石組みの技術だ。中には高さ7m、120トンの巨石も含まれる。

実は、私がここで小高い丘を昇ったり降りたりしたとき、身体に普段と違う違和感が。それはなぜだろうか。次で述べてみたい。

山岳の列車

ペルーにはアンデス山脈などがあり、山岳地方といえる。首都のリマは標高150mだったが、クスコは標高3399mと富士山



図6

の高さに近く、高山病のリスクがある。

私は前もって特効薬ダイアモックスを持参し、クスコに到着次第すぐに服用していた。ゆっくり動くように心がけていたのだが、やはりいつもよりすぐに倦怠感を感じた。

クスコから標高2000mのマチュピチュ駅に行くには、距離約110kmを走る特別列車・PeruRailがある(図6)。険しい斜面を登坂降坂するため、途中にスリットトラックもあつた。これは箱根登山電車のように、途中で進行方向が変わり線路がジグザグになっているものだ。



図7



図8

本列車はなかなか洗練されており、列車の中で、美味しいお茶とお菓子、また、歌と踊りなどアミューズメントなども含まれている(図7)。私は数ヶ月前に、インターネットで予約し、直前にペルー国内で切符を入手でき搭乗できた。

マチュピチュ

マチュピチュ駅からバス標高2400mのマチュピチュに向かう。実際にマチュピチュに足を踏み入れてみると、ようやくその実像が分かってきた(図8)。

雨が極めて少ない高山気候で、すべての建物は石を積み重ねられたもの。住居がこんな風に作られるとは驚きだ。日本の木の文化とは全く違う(図9)。



図9

こんな天空の街が生まれた謎とは？ 様々な固い石について柔軟に考えてはみたがわからない。ただ、少なくとも一部は宇宙人が関わっているかもしれないと推理してみた。あなたはどうか。思うだろうか。

(板東浩、ばんどうひろし、医学博士、糖尿病専門医、ピアリスト)